

## 日本語とドイツ語の受動態の対比について

佐藤 厚\*・進藤 俊一

Zum Kontrast zwischen dem japanischen „Ukemi“  
und dem deutschen Passiv

Atsushi SATO, Shunichi SHINDO

(昭和63年9月9日受理)

Die vorliegende Arbeit stellt die Skizze der kontrastiven Untersuchung des japanischen „Ukemi“ und des deutschen Passivs dar. Erstens wird die Unterscheidung zwischen der kontrastiven Sprachwissenschaft (der kontrastiven Grammatik) und der historisch-vergleichenden Sprachwissenschaft (der vergleichenden historischen Grammatik) erklärt. Zweitens wird das deutsche Passiv, dann das japanische „Ukemi“ in Umrissen gezeichnet. Darüber hinaus werden die Eigenschaften des deutschen Passivs mit denen des japanischen „Ukemi“ verglichen. Schließlich wird der Fremdsprachenunterricht (insbesondere Deutschunterricht) in Zusammenhang mit der kontrastiven Sprachwissenschaft in Betracht gezogen.

## 0. 初めに

任意の2つ以上の言語を取り上げて、それらを比較するという学問、研究には比較言語学(比較文法)と対照言語学(対照文法)の2つがある。その違いというのは、まず、比較言語学(比較文法)というのは、19世紀において発達した、歴史的言語学であり(従って、正確には、historisch-vergleichende Sprachwissenschaft もしくは vergleichende historische Grammatik という)、系譜関係のある言語間の比較とそれらの祖語再建という確立した目標を持つものである。これに対して、1950年代から1960年代にかけ、アメリカ構造主義言語学の後ろだてを得て登場した対照言語学(対照文法)は、比較するものが同一言語に関する2つの側面に関するものであっても、異なる言語に関するものであってもよく、その異なる言語というのは、系譜的関係のあるものであっても、ないものであってもよい、というものである!)すなわち、比較言語学(比較文法)が系譜関係のある言語間の比較に限定されるのに対して、対照言語学(対照文法)はそうではない、限定されないという点が違うところである。

\* 秋田工業高等専門学校 独語 非常勤講師

本稿では、日本語とドイツ語とを取り上げ、更に日本語の受身とドイツ語のPassivに絞って、その対照言語学的研究について基本的な点を整理し、まとめてみる。日本語の受身とは、すなわち、Passiv des Japanischenということになる。

## 1. ドイツ語の Passiv について

最初にドイツ語のPassivについて述べることにする。そもそもPassivはAktivと一対をなす態(Genuss verbi, Diathese)の一つである。更に、これらの他に、態にはMedium(中間態)というものがあり、本来これは、主語の行為の作用が自分の身邊に及ぶことの表現であるが、しばしばこの形は受動につながることもある。

Passiv といえば現代のドイツ語では何よりもまず「werden + 過去分詞 (Partizip II)」の形式が念頭にうかぶが、古い時代、mhd. (中高ドイツ語)においてもやはり、werdenの現在、過去と結び付いてPassivの現在及び過去を表わす。

hie wirt von in verhouwen vil manec helm  
unde rant.

(Das Nibelungenlied)<sup>2)</sup>

おびただしい数のかぶとと楯が彼らによって切り裂かれるでしょう。

現代語の例を挙げると、

Die Blumen werden vom Gärtner gebunden.  
(Duden Grammatik s. 92)  
花は庭師によって束ねられる。

以上の様に、助動詞として werden を使った Passiv, すなわち, werden-Passiv は動作受動 (Handlungspassiv もしくは Vorgangspassiv) と呼ばれる。

受動のための助動詞として普通 be のみの使用が標準となっている英語に対して、ドイツ語では更に、sein も受動の助動詞として認められている。古い時代の、mhd. の例として uns ist wunders vil geseit = uns ist viel Wunderbares gemeldet. geseit = gesagt という例があるが、18世紀ごろになると、従来 sein と werden といずれか一方が選ばれていたのに対し、この両方ともが多少異なる意味をもって使い分けられるようになった<sup>3)</sup>。すなわち、werden は受身の動作を示し、sein の方は状態を表わす気持が強くなったのである<sup>4)</sup>。今日では werden を使った Passiv は先に述べた様に、動作受動と呼ばれるのに対し、sein を使った、すなわち、sein-Passiv の方は状態受動 (Zustandspassiv) と呼ぶのが定着している。ドイツ語の Passiv はこれら 2 つの助動詞による代用表現である。現代語から例を挙げると、

Das Fenster ist geöffnet.  
(Duden Grammatik s. 94)  
窓は開けられている。

次に、ドイツ語の Passiv において、対照言語学の研究の観点から特に問題となるところについて述べていきたい。

第 1 は、ドイツ語は werden-Passiv, sein-Passiv といったオーソドックスな Passiv 以外に様々な受動的表現を持っているということである。ドイツ語においては英語ほど Passiv が好まれないのに比して次に示されるような様々な代替表現が用いられるのである。

i) man を主語とする Aktiv

動作主が不明であるか、あるいは動作主を挙げることが好まれない場合は、man を主語とし

た Aktiv によって受動の意味が表わされる。この形態はドイツ語では極めて多く用いられる。

Man erwartet eine reiche Ernte.  
豊かな収穫が期待せられる。

上の日本語訳が示すように、この man-構文は受身で訳すと当てはまる場合が多い。

ii) sich + 他動詞

いわゆる再帰表現であるが、動作主は考えられないで、ある動作が自然に、おのずから行なわれる場合に用いられる。

Die Berge bedeckten sich früh im Herbst mit Schnee.  
それらの山は秋早く雪でおおわれた。

iii) sich + 不定形 + lassen

ある動作が抵抗を受けることなく、うまく行なわれる場合に用いられる。

Er läßt sich leicht durch Geld erkaufen.  
彼はすぐに金で買収せられる。

iv) sein (bleiben, stehen, geben, gehen) + zu + 不定形

ある動作がなされ得ること、あるいはなされるべきであることを表わす。

Der Dom ist von weitem zu sehen.  
その大寺院は遠くからでも見られる。

v) bekommen (erhalten, kriegen) + 過去分詞

「～される、～してもらう」の受動の意味が表わされる。

Ich bekam das Buch zugeschickt.  
その本を送ってもらった。

以上に分類したものは従って Passiv ではなくして passivisch な表現、受動態ではなくして受動文ということになるのである<sup>5)</sup>。

次の問題点は自動詞の Passiv である。他動詞・自動詞の定義・分類は Passiv と関連してくるが、4格ではないものの(4格の目的語を取れば他動詞)、

## 日本語とドイツ語の受動態の対比について

2格, 3格, 前置詞格のそれぞれの目的語を取る自動詞の場合, 意味内容的には「他動詞の Passiv (persönliches Passiv) と同じでも非人称受動 (unpersönliches Passiv) ということになるのである。

Dem Bettler wurde von dem Pastor geholfen.  
乞食は牧師に助けられた。

これに対して, 目的語をまったく取らない自動詞 (絶対動詞) の Passiv はドイツ語の Passiv にとって最も特徴的なものである。

In der Stadt wird überall gebaut.  
町ではいたるところ建設の槌音がきこえる。

上のような自動詞, 絶対動詞の Passiv とは表現形式の仮構であり, その意とするところは動作の強調である。強調された動作はいきおい感情がこもり, 命令, 要求口調になる (潜在的行為者が特定の人の場合), また叙述形式としては躍動的になる<sup>6)</sup>。

すなわち, Passiv とはいえ, 普通の他動詞の Passiv などとはまったく異なるものである。

以上の2点, 様々な受動的表現を持つこと, 自動詞, それも絶対動詞が Passiv を作れるということ, が対照研究の観点から見たドイツ語の Passiv の特徴である。

次に, これらを念頭において, 日本語の受身, Passiv des Japanischen を見てみることにする。

## 2. 日本語の受身について

今回は日本語の受身について, ドイツ語の Passiv との対比を試みながら述べていきたい。

現代日本語で受身の表現形式は「動詞の未然形+受身の接尾語(れる, られる)」である。文語では「る, らる」, 古くは「ゆ」が用いられている。「～してもらう」とか「～を受ける, ～を蒙る」というような語法が類似の意味を表わすのに用いられるが, 狭義の「受身」の形式として, ドイツ語の Passiv といえば「werden+過去分詞」, 「sein+過去分詞」に当るものとして, 「れる, られる」をまず中心にすえる。「れる, られる」には受身のほか, 自発, 可能, 尊敬などの表現の役目もある。それらは個々別々に存在するのではなく, みな関連性があり, 受身も自発から出たものと考えられている<sup>7)</sup>。

「れる, られる」はドイツ語や更に英語の「受動の助動詞+過去分詞」よりも広い用法がある。すなわち, 日本語では同じ受身といっても,

a) 動作や作用の影響を直接受けるものを主語と見る場合 (動作主は「に(よって)」で表わす):  
犬が子供に撲たれる。

b) ある対象に動作や作用が加えられ, そのことの影響を受けるものを主語とする場合 (動作主は「に」, 直接の対象物は「を」で表わす):  
飼い犬を他所の子に撲たれる。

c) 自動詞で表わされる他者の行為の影響を心理的に負った, いわゆる迷惑 (常にマイナス面の悪い影響とは限らないが) の受身的表現: 愛犬に死なれる, 女房に泣かれる, 雨に降られる。

となるが, 通常, まともにドイツ語の Passiv で表現されるのは a) の「犬が撲たれる」のような直接的受身の場合である: Der Hund wird von dem Kind geschlagen.

犬が子供に撲たれる。

b) のような場合でも Aktiv・Passiv の直接転換に当るわけではないが, 犬を受動の主語にし, 利害心理を3格で表わせば, 似たような表現ができないことはない: Mir wurde der liebe Hund von einem fremden Mann geschlagen. 私の愛犬が見知らぬ男に撲たれた。(文法上, 犬が主語である点は mein Hund wurde geschlagen. の場合と同じ。)

しかし, c) のいわゆる迷惑の受身のような場合は, ドイツ語の「werden+過去分詞」の形式では表現しがたい。そして, この自動詞による心情的受身が自由自在に用いられるということが, 日本語の重要な特徴の1つである<sup>8)</sup>。

金田一春彦はこのc) のような場合について, 純粹の受動態ではなく, 「被害態」とでも言うべきものだ, と述べている<sup>9)</sup>。

また, 中島文雄によれば, 受身動詞の語尾が自発動詞や可能動詞の語尾と同じ「れる, られる」であることから, 英語の受動文などとは (ということ) はドイツ語の Passiv と一筆者注) 性格がちがうことは明らかである。日本語における能動と受動の関係は「太郎が私に勝った/私が太郎に負けた」と同じである。「勝つ/負ける」という事柄を構成する2人のうち, 直格で考えられたものが「が」, 斜格のものが「に」で表されている。これと「妻が(私に)死んだ/(私が)妻に死なれた」は同じ発想法

である、としている。日本語では話し手からの発言であることが前提とされているので、いちいち「私が/に」と言わないだけである、というのである。そこで、こう見てくると「れる、られる」によって作られる本来の日本語の受動文というのは、自発動詞と見るべきものである。西洋語の影響で「によって～される」という受動表現ができたので、その見地から自発動詞を受動動詞と見てしまうので、日本語には自動詞の受身がある、などと問題にされるのである、と述べている<sup>10)</sup>。このように、中島文雄は日本語における自動詞の受身というものに否定的である。

このように日本語の自動詞の受身を巡っては、解釈、見解が分かれるのであるが、ドイツ語においても自動詞、特に目的語をまったく取らない絶対動詞の Passiv については、どういう動詞が、そしてどういう条件のもとで成立するのか、など問題点も多く、日本語の受身、ドイツ語の Passiv それぞれにとって自動詞の扱いが鍵になるようである。そして更に、日本語、ドイツ語、英語といった枠を越えた、受身の、受動の発想、思想というのもあるのである<sup>11)</sup>。

### 3. 外国語教育との関連について

最後に対照研究の応用面について考えてみたい。すなわち、外国語教育との関連である。ゲーテがエッカーマンとの対話の中で、「外国語を知らない者は、自国語について何も知らない」(Wer fremde Sprachen nicht kennt, weiß nichts von seiner eigenen.) といったが、これは外国語の学習はおのずと自国語と外国語との比較につながるという意味を含んでいると考えられる。日・独語対照研究の成果は単にドイツ語教育のみにとどまらず、日本語、国語の勉強にとっても新たに目を開かせるものとなるだろう。また、ドイツ語を学習する前に、英語を学んでいれば、更に、ドイツ語と英語との比較、対照が可能となり、日・独・英と言語一般、言語そのものに対する関心を生徒、学生に起こさせることになろう<sup>12)</sup>。

#### 注

- 1) 安井稔、「対照研究の流れ」『言語』Vol.10, No.12, 1981, S.22~29
- 2) 古賀允洋, 演習中高ドイツ語文法, 大学書林, 1979, S.117~119
- 3) 相良守峯, ドイツ語学概論, 博友社, 1972

(<sup>1</sup>1965), S.271

- 4) 同 上
- 5) 三好助三郎, 独英比較文法, 郁文堂, 1976 (<sup>1</sup>1968), S.188~191
- 6) 福田幸夫, ドイツ語は英語とどう違うか, 郁文堂, 1972, S.87
- 7) 浜崎長寿・乙政潤・野入逸彦編, 日独語対照研究, 大学書林, 1985, 「受動」S.162
- 8) 同上, S.162~163
- 9) 金田一春彦, 日本語新版(下), 岩波書店, 1988, S.125
- 10) 中島文雄, 日本語の構造—英語との対比, 岩波書店, 1988 (<sup>1</sup>1987), S.166~169
- 11) 安西徹雄, 英語の発想(第5章 受動態と受身), 講談社, 1983
- 12) 川島淳夫, 『高校教育総合事典』外国語—ドイツ語, 第1法規, 1983, S.457~459

参考文献(上に挙げたもの以外)

対照研究一般, 日独対照研究関係

Engel, U. (Hrsg.), Deutsche Sprache im Kontraste, Tübingen: G. Narr, 1977

Kaneko, Tohru, Passiv versus Ukemi. In: Deutsch und Japanisch im Kontrast Bd. IV, Heidelberg: Groos, 1987

Kishitani, Shoko, Die Genera verbi im Deutschen und Japanischen, 「Beiträge zur Germanistik」Tokyo-Univ. 1973

Moser, H. (Hrsg.), Probleme der kontrastiven Grammatik. (=Sprache der Gegenwart Bd. VIII), Düsseldorf: Schwann, 1970

Nickel, G. (Hrsg.), Reader zur kontrastiven Linguistik, Frankfurt a. M.: Athenäum, 1972

Stickel, G. (Hrsg.), Deutsch-japanische Kontraste-Vorstudien zu einer kontrastiven Grammatik, Tübingen: G. Narr, 1976

金子享, 「日独語対照研究の現状」『言語』Vol. 10, No.12, 1981, S.68~73

岸谷敏子, 日本語の動詞の態をどうとらえるか—E. コセリウ氏の論文を読んで—, 「Energeia」6号, 1980

日本語関係

佐藤喜代治, 日本文法要論, 朝倉書店, 1977  
高橋太郎「現代日本語のヴォイスについて」

日本語とドイツ語の受動態の対比について

『日本語学』 Vol. 4, No. 4, 1985, S.4~23  
山口明穂編, 国文法講座 第六卷, 明治書院  
1987

辞典

Der Große Duden 4: Die Grammatik,  
Mannheim, 1973

Handbuch der Linguistik, München:  
nymphenburger, 1975

Bußmann, Hadumod, Lexikon der  
Sprachwissenschaft, Stuttgart: Kröner,  
1983